2011年3月11日に東北地方を中心に未曾有の被害をもたらした東日本大震災。全国の地方自 治体をはじめとする各方面からの様々な支援活動や多くの人々からの義捐金など、日本全国で 被災地を支援していく動きが広がっています。この日本のちょうど反対側に位置するブラジル にも、今回の大震災を通じ、祖国である日本を憂える日系人をはじめ数多くの方がいます。

今号では、奇しくもこの度の震災が発生した同日に「多文化共生地域活性化調査」のため、 ブラジルへ出発した両名が1週間の滞在中に感じた、ブラジル日系人社会が持つ日本への思い や絆を中心にご紹介します。

# ブラジル日系人社会の日本への熱い「思い」と「絆」

全国市町村国際文化研修所教務部 副主幹 林 敬治 主査 出口 利明

\_\_\_\_\_

### 1. はじめに

私たち2人は、2011年3月11日(金)から21日(月)までの期間、ブラジル連邦共和国サンパウロ州サンパウロ市を訪問した。

目的は、経済危機により帰国した日系ブラジル人に対する現地での支援の状況および今後の来日動向を調査すること、ブラジルの文化・習慣、制度を直接体験し、今後の多文化共生研修に活かすことである。

今回の調査では、ブラジル滋賀県人会など の多大なるご協力を得て、多くの人の話を伺 う機会に恵まれた。

また、我々がブラジルへ向けて出発したその日に東日本大震災が発生したため、心苦しく感じつつも、ブラジル国内からの視点で日本の動きを目の当たりにすることとなった。

今号では、この大震災の発生を通じ、ブラジル滞在中に感じたブラジル日系人社会について、その一部をご紹介する。

#### 2. ブラジル人社会における日系人の存在

ブラジルは世界最大の日系人社会を有し、 日系人の総人口は約140万人といわれている。 ブラジルの総人口が約2億人であるから、総 人口に占める割合は約0.8%にすぎないが、ブラジル社会に大きな影響力を持っている。

日系人社会の歴史は、1908年に移民として ブラジルに渡ったところから始まり、過酷な 就労環境の中、勤勉さと誠実さでブラジル人 社会の中で確固たる地位を築き、苦学しなが らも大学等の高等教育を受け、教育程度の高 さから、政界、経済界、医師や弁護士など広 く活躍し、ブラジルの発展に大きく寄与し、 それは現在にも続いている。

日系社会は、第二次世界大戦前後から、サンパウロ市中心部のリベルダージ地域を中心に、日本人街をつくり栄えてきた。現在は、日系人の現地への同化が進むとともに、中国人等が移民として転入してきたこともあり東洋人街と呼ばれるようになった。地域内には日系三団体といわれる、ブラジル日本文化福祉協会、サンパウロ日伯援護協会、ブラジル都道府県人会連合会の事務所が置かれ、提灯の形をした街灯や鳥居、そして多数の日本語の看板をかけた店舗が軒を連ねるなど、世界最大の日本人街を形成している。

そして、日本文化は、この地域の日系人を 中心に今でもしっかりと守られ、街のいたる ところでかいま見ることができる。



リベルダージ地域にある鳥居

## 3. 東日本大震災の発生とブラジル社会 の対応

前述のとおり、我々が日本を出発した3月 11日に東日本大震災が発生した。移動の途中、 空港で見るテレビ報道などでしか状況がわか らないままブラジルへ到着したところ、多く の方から温かい励ましを受けた。

入国審査時に入国管理官が、審査そっちの けで自分のことのように心配してくれたこと をはじめ、街で出会う人など、こちらが日本 から来たとわかると必ずお見舞いと励ましの 言葉をかけてくれた。滞在していたホテルの 従業員が日本にいる親戚と連絡がとれないた め、その安否を非常に気遣っていたこともあっ た。

ブラジルにおける日本の震災に関する報道 は、現地の邦字新聞(サンパウロ新聞、ニッ ケイ新聞など) ばかりでなく、現地のあらゆ るメディアで紹介されていた。現地の人に聞 くと、日本のことがこのように毎日トップ ニュースになるのは珍しいことであり、日系 社会だけでなく、ブラジル全体としても強い 関心を持っていることがうかがえた。ただ、 災害状況のほか、デカセギ家族も含めた被災 者等の情報、日本のNPOによる多言語情報提 供などを伝えている現地邦字新聞と比べ、そ の他の現地メディアは、被災状況や放射能汚 染を中心にややセンセーショナルに報道して いるように感じられた。そのようなこともあ り、日系ブラジル人の人材派遣サービスを行 う会社を訪問した際には、この震災の影響に より日本への渡航を延期したという話も聞い た(震災により工場の稼働がストップしたと いうこともあるのだが)。



現地邦字新聞の紙面(サンパウロ新聞、ニッケイ新聞)

現地テレビ局もリベルダージ地域を中心に 連日取材を行っており、我々も着いた早々、 取材を受けることとなった。

このような中、ブラジル到着の翌日にブラジル滋賀県人会が我々の歓迎会を開いてくださったが、そこで我々は震災義損金を託された。この前日に滋賀県人会は、急遽臨時総会を開催し、会員から義捐金を募り、日本に送金することを決定したとのことだった。ブラジル滋賀県人会の山田康夫会長からは、「額としては少ないが、少しでも早く日本のために役立ちたかった。心から心配しており、早く復興してほしいという思いを日本に届けてほしい」との言葉をいただいた。

その翌日には、『ポルトガル語日本語医学用語辞典』の出版記念パーティのお誘いを受けた。このパーティでは、サンパウロの日系社会から多くの人が参加しており、この日の売り上げの全てが震災義捐金として寄付された。

そのほか、現地日系主要団体合同で義捐金 口座を開設し、その募集も開始されていたほ か、被害者が多く出た東北3県人会により合 同慰霊式も行われた。震災による被害が大き かった地域の県人会では、出身県の県庁など を窓口に情報収集につとめられていた。

### 4. 日系人の若者と日本への熱い思い

このようにして私たちは、被災した日本への対応をいち早く行ったブラジル日系人社会の日本に対する思いを実感したところであるが、このほか、日系人学生が行う「夏祭り」は、ブラジル日系社会の若者たちが日本に対してどのような思いを持っているかを知ることができ、印象に残る訪問先の一つであった。

「夏祭り」とは、各県人会の垣根を超えて、ブラジルの日系人学生たちが自主的に行っている手作りによる催しで、日本文化の紹介や、日本の屋台などが出店されているほか、各県人会の若者による出し物が行われる。ここでの収益金は、日本への「海外技術研修員・県費留学生」のために使用される。

「海外技術研修員・県費留学生制度」とは、 各都道府県が出身ブラジル人子弟に日本での 研修・就学の機会を与え、ブラジルでの社会的、 文化的、経済的地位の向上を図ることを目的 とした事業である。

我々が会場に着いたとき、沖縄県人会の若 者たちによる沖縄民謡のパフォーマンスが行 われ、満員の会場は、熱気と興奮で満ちあふれ、 その雰囲気は最高潮に達していた。

多くの若者たちが日本文化や日本への留学 に興味を抱いて、こうしたイベントを自主的 に実施していることは、日本ではあまり知ら れていない。

このイベントは全て学生たちの運営による ものであるが、かつての技術研修生・留学生 たちもこのイベントに参加し、後輩たちを温 かい目で見守っている姿は印象的だった。



夏祭りで沖縄民謡を演奏する若者たち

今回の調査でブラジルの社会制度について 我々にレクチャーしていただいたブラジル愛 知県人会のアンドレ・ハヤシ弁護士もその一 人であった。彼もかつて留学生として日本に 滞在した経験があり、日本での経験を経て、 はじめて自分のルーツが何であるか、そして 自分がブラジル社会の一員であることに気づ き、それまであまり関わろうとしなかった日 系人社会と積極的に関わるようになったとの ことであった。

彼だけでなく、日本で学んだ多くの人たちが同様の思いを持ったそうである。そしてその人たちの日本に対する強い思いが、次の世代に引き継がれていることが、ブラジルに来て、実際に目にして、直接話を聞いて、初めて知ることができた。

今回の調査を通じ、山田会長は「長い間、 日本とブラジルの間で多くの人が育ち、関係 を築いてきた歴史がここにある。これをやめ るのは簡単だけど、やめたらそれで全てが終わり。日本によって多くの日系ブラジル人たちが育てられた。だから今、日本がこのような状況になって、少しでも恩返ししたいと思うのは当然だ」と何度も熱く語られた。

また、今回出会った多くの人々からは、次の言葉とともにその思いを我々に託された。 「『自分たちの思い』が日本に少しでも伝わってほしいし、地球の反対側で日本のことを考えている人たちがこれだけいることを日本の皆さんにもぜひ知ってもらいたい」

### 5. おわりに

ブラジルという国は、時差が12時間で、地理的には日本のちょうど反対側に位置している。しかし、多くの人たちは、日本に対して非常に好意的な印象を持っている超親日国であり、我々が思っている以上に日本文化等にたいへん興味を持っている。ブラジルの友人から「距離は遠いが我々の心は近い」ということをよく聞く。それはブラジル社会に貢献してきた日系人の存在が非常に大きいのではないかと思う。

それだけではなく、ここでは自分たちと同じ言葉を話し、文化的背景を共有している人たちがしっかりと存在しており、その人たちが日本に対して我々が思う以上に熱い思いを持ってくれているということをいろいろな場所で感じることができた。今回の出張において様々な人と知り合うことができたのは、ジルの各県人会があればこそだが、どこでも気軽に話を聞いてもらえたのは、お互いの国を知っている人たちが築いてきた「絆」というものが、まだ少なからず残っているからだと実感した。

だが、それも一方からの思いだけであっては、いつかなくなってしまうような気がしてならない。ちょうど我々の反対側にあるこの国でこのような社会が存在することを少しでも多くの日本人にわかってもらいたいと切に思う。